

「闇から光へ ぶれない人生」

I ヨハネ 1 章

逆さ絵がありますが、反対側から見ると違うものが見えます。感じている事は事実とは違うかもしれません。ミネソタ州で黒人が殺される事件があり、黒人差別の象徴に使われました。しかし、この当事者達について正しい情報が公開されていませんでした。私達が見聞きしている事が一部の情報にもかかわらず悪いと判断しているのです。私達は物事の真理を見抜く力を持ち、何が起ころうと、その情報があったから、問題があるから動くのではなく、すべき事を見抜き、どうあるべきか探さなければいけません。動機がずれていけば、反対されるともつづれてしまいます。自分の動機が正しかったかどうか見極めていられるでしょうか。計画を立てるのも成すのも神様です。周りは関係ありません。良い時とそうでない時にしている事が違う、ぶれている人の言う事は誰も聞きません。大切なのは昨日も今日も変わらないイエス様にどうやったら近付けるかです。私達はぶれてしまうので、ぶれたら戻り、悔い改める事が大切です。

■ ぶれない人生を生きる為に

私達の中には自己義が存在していて、他者のせいだと言ってしまう。自分に問題が起こるのは私達のずれた道を軌道修正し、戻るきっかけを与えているのであって、神様が私達を罰しているわけではありません。その時に誰の言葉を聞いているかが大切です。これによって人生が戻るか、ずれていくかわ変わります。自分に都合のいい事を言ってくる人、自分に同調する声は畏です。幸せになる為には、聞いて嫌な厳しい言葉を聞かないといけません。聞きやすい言葉や口に甘い食べ物は私達を悪くしていきます。固い食べにくい食べ物が必要なのです。

■ 初めからあったもの

神様は被造物を見せる事で初めからあったものから目を失ってはいけなくて教えています。私達が聞いている事は聖書を通して以前から聞いている事です。それと一致していないから、あたかも初めて起こったかのように思ってしまう、もう信じられないと言ってしまうのです。裏切られて、苦しみに遭う事が聖書に書かれています。ダビデはサウル王から嫉妬され追われる身となりました。ダビデはサウル王を殺すチャンスがあった時に「神が立てた王に私が逆らう事ができようか」と言い、王の衣に剣を向けてしまった事さ後悔しました。全てが完璧に出来るわけではありませんが、正しさとは変わっていけない時にぶれない事です。ダビデが大切にしたのは、神の権威に対しては逆らわない事、どんなチャンスでも神様の時でなければいけないという事です。サウル王を殺すチャンスが二度目にあった時、ダビデの僕が「主は私達にサウルの命を預けられた。」と言いましたが、ダビデは「神が立てた王に剣を向けない。裁くのは神のみ」と言います。ダビデは、何度も反省して涙しながらも、裏切りを繰り返すサウル王に対して、この人はもう変わらないと思ったはずですが、それでも自分の力で王になろうとはしませんでした。ぶれない為に祈りました。その祈りが詩編 141；1～6 です。苦しい時に黙ってはいられないのが私達で、もう嫌だ、あの人は〇〇だと言ってしまう。でもダビデはこの苦しい最悪の時に「私の口を閉ざして下さい。」と祈りました。「私の心を悪い事に向けず、彼らの旨い物を食べない様にしてください。正しい者が愛情を持って私を打ち、責めますように。それは私に注がれる油です。私の頭がそれを拒まないようにして下さい。彼らが悪行を重ねても尚も私は祈ります」と言ったのです。私達の心には他者と比較してあの人よりはましという心、弱さがあります。しかし誰一人として正しい人はいません。だからこそダビデはこの様な祈りをする事ができたのです。なかなか出来ることではありません。しかし出来るからこそダビデも祈ったのです。祈りは出来ない事を願うことです。では、最初からダビデはこうだったのでしょか。いいえ、ダビデも兄弟に馬鹿にされ、数にも入れてもらえず、荒野で何十年も訓練にあい、同胞からの不満に耐え、諦めたくても諦められないそんな背景の中で学んでいきました。もし、あなたが何年も同じ問題で苦しむ戦っているのなら、何か道を外しているかもしれません。神様が罰を与えている訳ではありません。道を外している、真っ直ぐに歩けないので、正しい道に戻らなければいけません。どうしてこんなに頑張っているのに、何でこんな事を言われたいといけなかつたのかと思つたとしても、耳で聞

きたくない事を聞かなければいけません。ダビデはこれを油と言いました。絡まった人生ではなくするための油です。この油がその人をかくわしい者に変えていきます。では、どんな言葉を聞くべきでしょうか。

■ 魂を鎮め、知恵を聴く

①「あった」ローシェ 創世記 1：2 「地は何もなかった。」あったのは、何もない設計図、土台です。あなたの設計図が初めからあり、それは必ず成るのです。光をあれと言われたその時に、あなたが生まれるまでの計画を立てていたという事です。ずれるので計画通りにいかないだけで、戻れば必ず成るのです。

②「聞く」シャーマ 創世記 3：8 「主の声を聴いた。」人と妻は主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。隠れる = ずれた = 道を外す事です。聞くべき事は、道を外した時に、ずれた時に語られる神の言葉です。

③「見る」ラーアー 創世記 1：4 「光を見てよしとされた。」神はこの光と闇とを区別された。神は光であって神のうちには暗いところが少しもない。

神は闇のない姿になられました。闇の中にずれて行ったので光の中に行く必要があります。

④「じっと見る」ナーヴァト空の星 創世記 15；5 アブラハムの神の計画。

神様はアブラハムに空の星を見上げさせ、子孫がこの星の数程に増えると言われました。ずれて、闇に行き見えなくなった者にどうやって光の中に歩めばいいのか見せたのです。見えないアブラハムに神様は見えるように空の星を見せて、神の計画を示しました。

⑤「手で触る」マーシャシュ 創世記 27：12 ヤコブに与えられた祝福

触るとは神様が触ると言う事。ここでは父イサクを騙して触らせています。神様にも触られたら、私達の悪巧みはばれてしまいます。でも、騙して祝福を奪おうとしたヤコブを神様は 12 部族の父にされました。既に神様に私達の心の悪巧みは、ばれています。神様はわかっているのに祝福してくれているのです。神様の方から触ってくれているのです。そんな神様が私達の人生の計画を立ててくれているのです。

■ 人生の決断；受ける者から与える者になる

神様の計画は私達が受けるより与える者になる事です。だから、私達が受けられないと思つた時にずれるのです。得ようとした瞬間に、誰かの物をもっと欲しいと思つた瞬間に祝福を失います。与えるとは心の事です。困っている人に、見せながら慈善活動をするという愚かな事ではありません。その人が変わるまで、命がけて仕えていく、与え続けていくイエス・キリストの生き方です。どれだけ酷い目に合わせられても与える事、赦す事を決断する事です。目の前の状況でぐらつかずに神様を見て、その人に愛を流す事です。どういう事があつても、諦めずに愛し続ける事です。もうやりたくないとか心の中で思つても、やらない決断を覆して、もう 1 回信じてやってみるのです。ダビデはサウル王を殺す事を辞めて、待つて愛を流しました。そして、30 年後イスラエルの王になりました。簡単な事ではなく、葛藤があつたと思います。でも赦しました。自分が罪人だとわかっているなら、相手を受容する事ができるはず。もし、自分に罪がないというなら真理は私達のうちにはありません。神を偽り者とするのです。闇の中に生きる事になるのです。愛の反対は憎む事ではなく、もう関わらない、知らないという無関心の事です。与えるとは相手の不足を見つけて困っている事を助けようと行動する事です。嫌いな人にする事なので、かなりの決断が必要です。ヨセフのもとに兄弟が来たときに、ダビデの前にサウルが来た時に、やっつてしまえという心があつたはず。その時に私の口に戸を立てて下さいと祈ったのです。あの人があんな事をしたと言われない為に、口に戸をたてて下さいと祈るので。私達があんな偽り者であつたとしても、戻ろうとするなら、神の計画は必ず実現していきます。

(要約者:日名陽子)

(2020年11月22日)